

## オリンピック、ボストンから箱根駅伝へ(敬称略)

高校生や大学在学中に世界のマラソンで活躍した選手もいました。第 10 回ロサンゼルス五輪で、金恩培が 6 位入賞。田中茂樹が第 55 回ボストンマラソンで優勝。瀬古利彦が全盛期の 1980 年モスクワ五輪に出場していれば、間違いなくメダルを獲得していたでしょう。

## 【八島健三】小樽中学～明治大学～安田生命

|            |          |                 |        |
|------------|----------|-----------------|--------|
| 1923 年 4 回 | 3 区 1 位  | 1 : 19 : 20 新   | 総合 4 位 |
| 1924 年 5 回 | 10 区 1 位 | 1 : 18 : 43     | 総合優勝   |
| 1925 年 6 回 | 5 区 1 位  | 1 : 45 : 34.8 新 | 総合優勝   |
| 1926 年 7 回 | 5 区 1 位  | 1 : 42 : 43.2 新 | 総合 2 位 |
| 1927 年 8 回 | 5 区 1 位  | 1 : 50 : 38     | 総合 3 位 |
| 1928 年 9 回 | 5 区 4 位  | 1 : 43 : 12     | 総合優勝   |

小樽中学校(現小樽湖陵高等学校)在学中の 1920 年にアントワープ五輪マラソン出場、21 位。翌 21 年に、第 5 回極東選手権マラソン日本代表。

箱根駅伝に 6 年連続出場。5 年連続区間賞。3 回の総合優勝に貢献しました。

## 【田代菊之助】人力車夫：中央大学

人力車夫として働きながら、中央大学の夜間部に在籍。1924 年のパリ五輪マラソン出場、

|            |          |                 |        |
|------------|----------|-----------------|--------|
| 1927 年 8 回 | 10 区 1 位 | 1 : 17 : 28 : 8 | 総合 2 位 |
| 1928 年 9 回 | 10 区 3 位 | 1 : 20 : 20     | 総合 8 位 |

20km 付近で棄権。当初、アマチュアではないので、最終選考会の出場が不可とされたが、大会直前に出場が認められました。大日本体育協会が決定した田代の五輪派遣に、早稲田、慶応、明治の三大学が大反発。他大学も呼応し、大日本体育協会主催大会への出場を拒否。内務省主催の神宮競技大会もボイコットし。日本のスポーツ界が紛糾する大問題となりました。箱根駅伝に 2 回出場しました。

## 【金恩培】養正高等普通学校～早稲田大学

|             |         |             |        |
|-------------|---------|-------------|--------|
| 1934 年 15 回 | 7 区 1 位 | 1 : 11 : 59 | 総合優勝   |
| 1936 年 16 回 | 7 区 5 位 | 1 : 17 : 47 | 総合 2 位 |

養正高等普通学校(日本統治下の朝鮮)4 年生の 1932 (昭和 7) 年 5 月、東京で開催されたオリンピック最終選考会で 2 位入賞。ロサン

ゼルス五輪マラソンでは、2 時間 27 分 28 秒で 6 位入賞を果たしました。卒業後、早稲田大学に進学、箱根駅伝に 2 回出場しました。

## 【田中茂樹】広島県比婆西高校～日本大学

19 歳、1951 年のボストン選考会を 2:28:16 で優勝。日大入学前、4 月の 55 回ボストンマラソン優勝。箱根駅伝に 2 回出場しました。

|             |         |             |        |
|-------------|---------|-------------|--------|
| 1952 年 28 回 | 3 区 5 位 | 1 : 17 : 24 | 総合 3 位 |
| 1953 年 29 回 | 5 区 1 位 | 1 : 28 : 17 | 総合 3 位 |
| 1954 年 30 回 | 3 区 3 位 | 1 : 14 : 02 | 総合 2 位 |
| 1955 年 31 回 | 5 区 3 位 | 1 : 31 : 02 | 総合 2 位 |

## 【瀬古利彦】早稲田大学

1978 年福岡国際マラソン優勝、世界歴代 10 位  
1979 年ボストンマラソン 2 位、世界歴代 9 位  
1979 年福岡国際マラソン優勝、モスクワ五輪代表権獲得も、ボイコットで出場できませんでした。日本最強のマラソンランナーです。

|             |          |             |         |
|-------------|----------|-------------|---------|
| 1977 年 53 回 | 2 区 11 位 | 1 : 16 : 58 | 総合 13 位 |
| 1978 年 54 回 | 2 区 2 位  | 1 : 13 : 54 | 総合 6 位  |
| 1979 年 55 回 | 2 区 1 位  | 1 : 12 : 18 | 総合 4 位  |
| 1980 年 56 回 | 2 区 1 位  | 1 : 11 : 37 | 総合 3 位  |

## ●田代菊之助(車夫で中央大学夜間部の学生)の1924年パリ五輪出場を巡るアマチュア問題

大日本体育協会は、1923年2月に競技者参加資格を改訂しました。

「車夫を業とするものは同時に学生たると否とを問はず之を第二部に属するものとす」とあり、車夫として働いていた田代は、当初、パリ五輪最終選考会の第一部のレースに参加することは認められませんでした。ところが、大会直前に一転して出場を認めました。10000mを日本記録で優勝し、マラソンと10000mの日本代表になりました。

競技者資格を守らない大日本体育協会の決定に、早稲田、慶応、明治の三大学が大反発。協会の大改造を求める決議文を提出しました。期日までに回答がなかったので、学生たちは更に反発。大日本体育協会主催の大会には、今後一切出場しないことを通達。これに十三大学が同調しました。1924年の内務省主催の明治神宮競技大会(国民体育大会の前身)の役員編成から、学生が要求する協会の役員を排除する配慮を見せましたが、十三大学は内務省主催の競技会もボイコットしました。

## ●日本統治下の養正高等普通学校

峰岸昌太郎率いる養正高等普通学校が、関西中学校駅伝大会(現在の全国高等学校駅伝競走大会の前身)に初出場から三連覇を達成しました。ここから、オリンピックや箱根駅伝出場者が生まれました。

金恩培 1932年ロサンゼルス五輪マラソン6位、箱根駅伝(早稲田大学)2回出場

南昇竜 1936年ベルリン五輪3位(銅メダル)、箱根駅伝(明治大学)3回出場

孫規禎 1936年ベルリン五輪優勝(金メダル)、明治大学(日本でのレースは許可されませんでした)

※日本統治下の朝鮮(日韓併合1910年8月29日～対連合降伏1945年9月2日)

現在の大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義共和国(北朝鮮)

## ●岡部平太、金栗四三と「オリンピックマラソンに優勝する会(1950年)」

戦後、日本が世界に勝てるのはマラソンしかないと考えていた岡部平太は金栗四三に相談。「オリンピックマラソンに優勝する会」を創設。福岡を中心に合宿を重ね、田中茂樹、西田勝雄、広島庫夫、山田敬蔵、濱村秀雄、貞永信義、重松森雄等、日本のトップ選手を育成、日本マラソンの黄金期を築きました。西田は、ボストンで2回入賞。ヘルシンキ五輪代表、箱根駅伝でも活躍しました。ボストンマラソン優勝：田中、山田、濱村、重松



写真：中央がっちりしたのが岡部

右端立っているのが金栗四三

一列目右端が田中茂樹

二列目左から二人目が山田敬蔵 (number.bunshun.jp より)

参考文献 ① 箱根駅伝公式サイト ② 西日本新聞『平和台を作った男』2019年1月8日

③ 根本想『日本におけるアマチュアリズムの形成』早稲田大学学位論文 2017年